

書籍紹介

池本卯典・小方宗次編

『獣医学概論』

近年、動物や動物園に関心が高く、大学農学部系では獣医学科の人气が上っている。この時期に本書の出現は有意義である。

編集は日本獣医生命科学大学学長・池本卯典：麻布大学獣医学部附属動物病院長・小方宗次の両氏である。

編集者の‘序にかえて’に、わが国の欧米式獣医学の事始めは、明治5年（1872）に陸軍省に馬医官がてきたこと。獣医教育の端緒は、明治10年（1877）1月に、現在の東京大学農学部の前身である駒場農学校（農商務省立）で開始され、私学では明治14年（1881）9月、私立獣医学校が魁であり、以来1世紀半の星霜を経て、現在（2007年）は16大学に約6,500人の獣医学徒が学んでいる、とある。

しかし、わが国の獣医教育に獣医学概論や獣医学原論の講座や学問体系の枠組もないとき、本書の編集に当り、大阪大学医学部の澤瀉久敬先生による「医学原論」の意味を汲む獣医学原論が不可欠であり、忘れがちであった獣医学の、獣医療のそして獣医師に求められる哲学を学び、それを極める科学として、獣医学概論を編集したと記してある。

本書は全11章、目次8頁、本文265頁あり、各章は13名の分担者で執筆されている。巻末に参考文献6頁分、索引9頁分、欧文と混合した用語の索引2頁あり、利用に便利である。

第1章 獣医学の道程——過去、現在、未来——

明治初年より第2次世界大戦終結まで、獣医学の主領域は家畜伝染病や臨床獣医学であった。大戦後、生命科学としての獣医学は家畜衛生、公衆衛生（人畜共通伝染病・食品衛生）、動物工学等の多くの分野を含んできている。今後一層の教育研究設備の充実、倫理教育、教員の増員、動物看護師制などが論じてある。

第2章 獣医学の歴史

8節よりなる。古代文明と獣医療、西洋・東洋の獣医療、日本馬の渡来、古代～江戸時代の獣医療の歩み、明治以後の西洋式獣医学校、図書などが記してある。

第3章 獣医療と生命倫理

11節よりなる。とくに、クローン法の成立（2001年6月）が記してある。本章の資料：1. 獣医師の誓——1995年宣言、2. 動物医療の基本姿勢、3. IAHAIO（人と動物との相互作用国際学会）ジュネーブ宣言（1995）、4. 獣医師倫理問題規程・資料集がある。

第4章 動物実験と生命倫理

8節ある。Smyth（1978）の動物実験の3R原則（削減 reduction, 洗練 refinement, 置き換え replacement）と Rowan A. & Goldberg A.（1995）の2つのR（責任 responsibility と統合された研究 research integrated）を加えた動物実験のあり方を提唱している。

また、動物の苦痛の制御・安楽死さらに、実験初心者や学生の実験実習の際の精神的動揺への配慮が必要と記してある。動物実験に法規制がある国：EU諸国、英国、米国が紹介してある。

第5章 動物の権利と福祉

3節ある。動物擁護思想の流れ（古代～近代）、英国・米国の現代動物権思想の背景と出版物、新しい聖書理解、動物福祉の定義などが記してある。

第6章 獣医療公衆衛生学領域

4節に分かれている。次の諸表等がある。1. 人獣共通感染症の伝播様式による種類と分類、2. 犬類と猫類の人獣共通感染症、3. サル類と主な人獣共通感染症、4. げっ歯類の主な人獣共通感染症、5. 狂犬病指定動物、6. プリオン病（伝達性海綿状脳症）について、7. 高病原性鳥インフルエンザの人への感染（強毒性新型インフルエンザ）、8. 各国の動物検疫、9. 食品中毒起因物質など。

第7章 獣医師の職域

2節よりなる。獣医師任用資格一覧、獣医師の職場(表)がある。

第8章 獣医学の国際性

3節ある。1924年フランス・パリに国際獣疫事務局(OIE)が設置され、現在160余ヶ国が加盟している。1951年に国際獣医学生協会(IVSA)が結成されている。その他、国際活動組織が列記してある(詳細は省略)。

附表として、獣医師教育制度の紹介:日本、英、仏、独、蘭、米、スウェーデン、ベルギー、カンボジア、ミャンマー、ベトナム、タイ。

第9章 獣医療と法

獣医師の資格、保健・衛生問題法規や動物の愛護と管理に関する法律などが記してある。

第10章 獣医療の展開

今後、高度獣医療への期待、情報化時代の日本獣医学教育の改善や動物看護の紹介。

第11章 獣医療と経営

獣医師の需要事情、診療施設の運営状況、米国の状況などが表記してある。

以上、大略の紹介とする。本書に、日本の風土にある馬頭観音信仰、さらには仏教の慈悲、儒教の仁など、生命倫理等についての附言やわが国の大学獣医学科のカリキュラムの一覧表の掲示を希望する。

(松尾 信一)

[文永堂出版、東京都文京区本郷2丁目27番3号、2007年7月、A5判、300頁、4,800円(税別)]

亀田一邦著

『幕末防長儒医の研究』

山口県のどのような都市を訪れたことがあるのかと考えると、岩国へ2回、防府へ1回、山口へ1回、関門へ3回、萩へ1回しかない。つまり筆者は観光目的が主体で学術的な研究旅行をしたことがない。まさに点と線をふわっと通りすぎたに過ぎないので、幕末の旧藩時代の区分も知らぬ筆者には誠に気ウツに傾きかねない。こんな心配の下にこの本を購入したのであった。

しかし儒医の研究という文字にひかれた事が偽りないところである。ところで、山口県の医史と申せば田中助一先生の著作『防長医学史(全)』が上梓されてより55年、再版から24年が経過している。少なくともこの30年間にまとまった周防、長門国の医史の出版については筆者は不勉強ゆえこれを知らない。関東の眼くぼりから申せば、久々の防長の医師研究であり、それも幕末の儒医と限られた点は全く目新しく無関心では居られない切り口といえよう。

内容を見てみると、第1編 坂家連壁考(久坂玄瑞の神医説他)、第2編 防長王学の展開(吉村秋陽とその門人、高杉東行の王学信奉)、第3編

医侠松本涛庵の研究(出自と医事)、第4編 下関と広瀬旭荘(長府娶嫁と赤関厄難)、第5編 下関出身の草莽儒医とその活躍(湖南の中村徳寅、福地苟庵小伝、『茂園残話』の研究)となっている。

著者の亀田一邦氏は中国学専攻で、九州国際大学附属校教員のかたわら山口県史編さん調査委員をされておられる。従って本著作では医師が取組んだ漢詩中心の文化活動を軸として、防長両国に出入した人物関係も調査されている。

日本人の教養の大動脈は古代より漢字、漢文をひもとくことで始まったと云われるごとく、天平勝宝3年(751)に日本最古の漢詩集『懐風藻』1巻が編集され成立した。申すまでもなく漢文学は奈良、平安を通じて宮廷中心の文化であった。と同様に医学、医術も同様の傾向を有していた。鎌倉時代にいたり漢文学は五山文学に代表されるように、僧侶の文化であった。医学、医術においては室町時代に僧医は分けられていった。しかし医師の文化活動としての漢詩作りは江戸時代もひき続き行なわれた。

江戸時代の漢学が朱子学派、仁斎学派、徂徠学